

日本語教師養成科の卒業生を対象とした 追跡調査（第 2 次調査）

日本語科 専任教授 角本 浩美

日本語科 専任教授 杉田 昌俊

日本語科 専任教授 福田 由美

・要旨

本校における外国人対象の日本語教師養成過程が開講 30 年を迎え、主に海外にいる卒業生に対し海外の教育機関の現状、卒業生の教育状況、日本語教師養成科のカリキュラムに対する評価等を調査すべくアンケート調査を実施した。

・キーワード

追跡調査、海外の日本語教育機関、非日本語母語話者教師、卒業生のサポート

1. 日本語教師養成科とは

1-1. 2017 年度までの日本語教師養成科

本校の日本語教師養成科（以下「養成科」）は、1986 年の開講以来 2017 年度までは外国人を対象としたコースであった。主に海外において日本語を教えるノンネイティブ教師を育成するために、日本語や日本文化に関する専門知識を深め、自分自身の日本語運用力を高めつつ、実践的な教授技術を身につけることを目標として教育を行ってきた。2017 年度までの累計卒業生数は 271 名で、その出身の内訳は資料 1 の通りである。

1-2. 2018 年度からの日本語教師養成科

文化庁に法務省告示基準第 1 条第 1 項第 13 号に日本語教員の要件として掲げられている「420 時間の日本語教員養成研修実施機関」の届出を行い、2017 年 5 月 26 日付で受理された。（文化庁届出受理番号：H29052613014）

2018 年度からは、養成科は日本人と外国人が共に学ぶコースとして運営している。

2. 第 1 次追跡調査

2-1. 目的

養成科は、開講以来日々の反省やコース終了時に行われる学生からのコース評価によってカリキュラムが改善されてきた。そして機会あるごとに卒業生に各国の日本語教育事情

や彼らの教育の現場について聞いてきたが、開講して14年を迎えた1999年当時の養成科担当教員（杉田・角本）が「養成科で教えていることが現場に合っているかどうかを確認し、養成科でこれまで行われてきたことの是非を問い今後の課題を見つけ出す機会にする」ことを目的として、それまでの全卒業生を対象にした追跡調査を行った。

2-2. 概要

第1次追跡調査は、1999年10月～2002年3月の間に3回行われた。その内容は、勤務する教育機関について、日本語を母語とする教師とそうでない教師の役割分担について、四技能を高める授業とその教材作成の実際についてなどである。（詳細は本校紀要17号参照）

その結果、以下のことが判明した。

- ・卒業生が教えている対象者にビジネスパーソンが多いこと
- ・学習者数が10名以下の規模のクラスで教えている卒業生が多いこと
- ・初級の「話す」教材と中級の「読む」教材を作成する機会が多いこと
- ・卒業生の要望としては、教授方法や教材に関する情報を発信してほしいことや卒業生同士が情報交換できる環境を作してほしいことなどがあること

そしてこの調査結果をもとに2000年4月以降のカリキュラムに変更^{注(1)}を加え、卒業生を支援する体制^{注(2)}を整えた。

3. 第2次追跡調査

3-1. 目的

第1次調査から十数年の時間が経ち、この間に世界を取り巻く情報環境、日本に対するイメージ、日本語の国際的価値、日本語学習者の事情、教育技術、教材・教具など様々なものが変化している。そして開講から30年目（2016年）を迎え、第1次調査の目的同様、現在卒業生が携わっている海外および国内の日本語教育と養成科の教育内容が合っているかどうかを確認する必要があると考えた。

そこで、卒業生が卒業から現在に至るまで、日本語および日本語教育とどのように関わっているかを知ることによって、養成科のカリキュラムを改善し、よりよい教育をしていくこと、そして、学校として卒業生の教育活動のためにどのような支援ができるかを探ることを目的とした調査を行うことにした。

3-2. 概要と対象

第2次追跡調査は2回に分けて行った。1回目の調査は第1次追跡調査同様全ての卒業生を対象に行い、2回目の調査は、1回目の調査の回答者のうち、日本語教育に携わった経験がある、もしくはその時点で携わっている卒業生に対して行った。なお調査は個別にメールで調査シートを送信する形で行った。

調査のスケジュールは以下の通りである

2016年 9月 第1回調査シートの作成

	10月	第1回調査シートの送信
	11月	第1回調査シートの回収
	12月	第1回調査結果の集計
2017年	3月	第1回調査結果の分析
		第2回調査内容の検討
	4月	「第1回調査の集計結果について」を回答者全員に発送
	7月	第2回調査シートの作成および送信
	9月	第2回調査シートの回収
	12月	第2回調査結果の集計
2018年	3月	第2回調査結果の分析
	5月	「第2回調査の集計結果について」を回答者全員に発送

3-3. 第1回調査

3-3-1. 目的

第1回調査は、卒業生全体の置かれている状況の把握と、基礎データの収集を目的として行った。

3-3-2. 内容

第1回調査は、2015年度までの卒業生のうち連絡先がわかっている145名に対して行った。調査内容は以下の5項目である。（詳細は資料2参照）

- (1) 卒業後の就業状況
- (2) 日本語との関わり
- (3) 養成科での学習がどのように役立っているか
- (4) 卒業後の日本語力
- (5) 本校に対する要望や意見

3-3-3. 結果

第1回調査には、46名の卒業生から回答があった。回答者の出身は台湾20名、韓国13名、ベトナム4名、中国3名、タイ、ミャンマー、マレーシア、フランス、ロシア、オーストラリアが各1名である。以下、回答内容をまとめる。

(1) 卒業後の就業状況

回答者46名の日本語教育の経験は以下の通りである。

現在日本語を教えている	20名
日本語を教えたことがあるが、現在は教えていない	16名
日本語を教えた経験はない	9名
無回答	1名

*日本語教育の経験がある卒業生は36名であった。

教育経験年数は以下の通りである。

1年未満	7名
1年以上5年未満	13名
5年以上10年未満	7名
10年以上	9名

教えている（教えていた）教育機関は以下の通りである。

大学、大学院	10名
高校	10名
中学	8名
日本語塾	17名（うち4名は経営も兼ねている）
個人レッスン	21名
その他	4名（政府系の教育機関、カルチャーセンターなど）

*教育機関に所属せず個人レッスンを行っている（行っていた）卒業生が予想外に多いことがわかった。

日本語教師以外で卒業後に就いた職業は以下の通りである。

日本語と母語の通訳・翻訳	8名
営業職	3名
事務職	5名
専門職	1名
その他	2名

（その他の職業＝日本国内の留学生カウンセラー、メディアコーディネーター）

*日本語を教えてはいないが、日本語学校事務や留学生のカウンセリングなど、日本語学習者と関わる仕事をしている（していた）卒業生がいることもわかった。

（2）日本語との関わり

日本語教師として日本語を使っている、もしくは使っていた	36名
日本語教師以外の仕事で日本語を使っている（使っていた）	6名
仕事以外で日本語を使っている（使っていた）	3名
卒業後、日本語を使う機会はない	0名
無回答	1名

「卒業後日本語を使う機会がない」という回答はなく、回答者全員が何らかの形で日本語との関わりを持っているようである。回答者の多くが仕事で日本語を使っており、メール作成、電話の応対、通訳翻訳などで日本語を使い、日本人の職員や日本人の客とコミュニケーションをしていると答えている。仕事以外での日本語使用場面は、例えば、旅行、ボランティ

ア活動、サークル活動などであった。

また、日本語を教えたいという気持ちの有無について質問をしたところ、「機会があれば今すぐ教えたい」が5名、「いつか教えたい」が9名、「わからない」が3名で、教えることに積極的な意欲を持っている卒業生が多いことがわかった。

（3）養成科での学習がどのように役立っているか

養成科で学んだことの中で役立っていることを自由記述方式で質問したところ、「全て役に立っている」という回答が多かった。具体的な記述を養成科の授業科目別に分類してみると、「日本語教育学」の内容に関する記述が一番多く、次いで「日本文化論」や「日本語学」（「日本語文法」「音声学」を含む）となっている。授業で使用したプリント類を現在も資料として活用している卒業生もいた。

科目ではないが、敬語、漢字力、会話力、日本語能力試験合格など自分自身の日本語力の向上を挙げた人も多かった。他にも、学生指導や日本人とのコミュニケーション、日本語力や教育方法に自信を得たこと、思考力が身についたことなど、様々な回答があった。主な回答を以下に挙げる。

「日本語教育学」関連

- ・教え方全般（6名）
- ・教材作成（7名）
- ・練習の方法（6名）
- ・授業準備、教案作成（5名）
- ・コースデザイン、カリキュラム作成（4名）
- ・教壇実習（3名）
- ・テスト作成（2名）
- ・学生指導の方法（1名）

「日本文化論」関連

- ・文化論全般（3名）
- ・歴史（10名）
- ・地理（4名）
- ・語彙（2名）

「日本語学」関連

- ・文法（16名）
- ・音声（12名）

その他

- ・日本の文化、習慣（11名）
- ・日本語力の向上（7名）
- ・自分に自信が持てた（2名）
- ・和食のマナー（1名）
- ・名刺交換などのビジネスマナー（1名）

- ・インタビュー活動（1名）
- ・漢字（1名）
- ・敬語（1名）
- ・自分で思考する能力（1名）

（4）卒業後の日本語力

卒業生の多くは卒業と同時に日本を離れるため、日本語力を保持するのが難しいであろうと考え、「自分の日本語力が不足していると感じるのはどんな時ですか」という質問項目を設けた。自由記述方式による回答で最も多かったのは語彙の不足に関する記述で、特に専門用語、慣用句、擬態語、流行語などに不足を感じているようである。次に多かったのはビジネス場面で使う日本語で、特に敬語やメールの書き方などが難しいという回答が多かった。

話す機会が少ないため、自分の日本語が正しいのかどうか分からないという悩みも多数挙がっており、特に教育現場では、「中級を教える時の文法説明や学生とのやり取りに自信がない」「発音に自信がないので五十音の授業が嫌い」という回答があった。

主な回答を以下に挙げる。

- ・語彙の不足（11名）
- ・ビジネス場面での日本語やマナー（11名）
- ・会話力の低下（7名）
- ・作文、メールを書くこと（6名）
- ・漢字（4名）
- ・専門用語（4名）
- ・発音、アクセントなど（3名）
- ・授業で文法を説明すること（3名）
- ・通訳、翻訳をすること（2名）
- ・読むこと（2名）
- ・中級を教えること（2名）
- ・小説や歴史を教えること（1名）
- ・歴史や政治の話題（1名）
- ・方言（1名）

（5）本校に対する要望や意見

本校に期待することや意見を自由記述方式で回答してもらったところ、目立って多かったのは、人と人との交流に関する要望であった。卒業生同士、卒業生と養成科担当教員、卒業生と現役の養成科学生、卒業生が日本語を教えている学習者同士、卒業生とその国に住んでいる日本人、など様々な交流を求めていることがわかった。教える苦勞を同窓生で共有し、相談や情報交換をしたり、養成科担当教員と話す機会を求めているようだ。過去には韓国と台湾に養成科担当教員が赴き、親睦会や研修会を開催したこともあったが、ま

たそのような機会を設けてほしいという要望もあった。また「養成科通信」^{注(3)}を高く評価している回答もあった。主な回答を以下に挙げる。

- ・ 卒業生同士、教員との交流（7名）
 - メールなどでやり取りをするのは難しい。LINE、ブログ、facebook の活用がよい。
 - 交流会を開いてほしい。
 - 互いの学習者がテレビ電話などで日本語で交流できるとよい。
 - インターネットを使ったネットワークを作してほしい。
 - 授業でぶつかる困難について先生に相談したい。
- ・ 日本人との交流（3名）
 - 授業でしか日本語を使う機会がないので自分の会話力が低くなるのが心配。
 - 母国でも日本人と交流するチャンスがあるとよい。
- ・ スキルアップのためのサポート（2名）
 - 話題になっている本や日本文化に触れる機会がほしい。
 - 日本語を忘れないためのサポートをしてほしい。
- ・ 「養成科通信」（4名）
 - とても役立っている。これからも続けてほしい。
 - 今よりも頻度を増やしてほしい。
- ・ その他
 - 文化学園の図書館を自由に使いたい。

卒業生としての要望以外にも、自分自身の日本語教育の経験を踏まえ、養成科在学中に身につけておいたほうが良いことや行っておいたほうが良いことを具体的に記述した以下のような回答もあった。

- ・ 一定期間インターンとして教壇に立つ機会があれば、就職活動で自己PRになる。
- ・ もっと模擬授業をしたほうが良い。
- ・ 教室運営、大人数のクラスでレベルが多様な場合の教え方、学習者の動機を高める方法などもカリキュラムに含めてほしい。
- ・ 日本各地のことをもっと知っておいたほうが良い。
- ・ 発表のしかたや言葉遣いを勉強したほうが良い。

3-3-4. 考察

今回の調査では、個人レッスンで教えている回答者が予想以上に多かった。養成科の教壇実習は、学習者数5～10人程度のクラスを想定して行っており、現在のカリキュラムの中では個人レッスンでの教え方に関する内容はほとんどない。教育機関に所属せず個人教授を行っている卒業生が多いことを踏まえて、テキストを選ぶポイントや、教師と学習者が1対1で行う練習の方法など、養成科の授業に反映させられることもあるのではないだろうか。

「養成科で学んだことの中で役立っていることは何ですか」という質問によって、日本語

教育学や日本文化論、日本語学といった主な授業科目が卒業後に役立っていることがわかった。しかし、この質問自体、養成科の教育内容に対する肯定的な回答を引き出すものであり、教育内容の不足している点は明らかにできない。これについては第2回調査で調べることにした。

卒業後の日本語力については、日本語力の低下（会話力や語彙力）と、留学中に獲得できなかった日本語力（ビジネス日本語や専門用語、矯正できなかった自己の発音など）の2つが問題として挙がっている。現在養成科が卒業生に対して行っているサポートは、メールでの相談受付と、「養成科通信」の2種類である。この「養成科通信」のさらなる充実を望む声もあるが、一方でメールでのやり取りに不便さを感じているという意見もあった。

卒業生が日本語力を維持するために、また教育現場の悩みを共有するために、卒業生同士が情報交換や相談をすることも有効だと思われる。本校に対する要望の中でも、様々な交流の機会を望む声が多かった。同窓会、研修会など直接交流の場を希望する卒業生もいれば、SNSやテレビ電話などインターネットを利用した方法への要望もあった。情報通信手段が発達している現代において、卒業生をサポートする方法はいろいろと考えられるだろう。卒業生の要望にどの程度応えられるのかを模索していくことが今後の課題であり、養成科の役割の一つであろう。

3-4. 第2回調査

3-4-1. 目的

第2回調査は、日本語教育に携わっている（携わっていた）卒業生がどのような教育現場でどのような教育活動を行っている（行っていた）のかを知り、養成科の授業内容が卒業後の教育活動にどう結びついているかを掘り下げ、今後の養成科のカリキュラムに反映させられることを見つけること、日本語を教えるうえで卒業生が抱えている不安や問題点を解決するために我々ができるサポートの内容と方法を考えていくことを目的に行った。

3-4-2. 内容

第2回調査は、第1回調査の回答者46名のうち現在日本語教育に携わっている、あるいは過去に携わった経験を持つ回答者36名に対して行った。

調査内容は、以下の5項目である。（詳細は資料3参照）

- (1) 就業教育機関の詳細情報
- (2) 教育活動内容の詳細とそれに対する回答者の意識
- (3) ノンネイティブ教師と養成科を卒業した教師の違い
- (4) 仕事に対する意識と姿勢
- (5) 養成科で学んだことへの評価

(3)は、以下の理由により調査項目に入れた。

世界全体の日本語教師数は64,108人で、過去36年間で15.6倍となっている。そのうち日本語母語教師の割合は22.3%であるが、減少傾向にある。（参考文献：国際交流基金「2015

年海外日本語教育機関調査報告書」より）つまり世界的に見るとノンネイティブの日本語教師が活躍する時代になってきていると言えよう。そのような状況の中で、養成科の卒業生が1年間の日本留学先として養成科を選び、日本で日本語教育を学んだ経験はどのように生かされているのだろうか。海外で教えているノンネイティブ教師の中には、日本留学経験がないが自国で日本語教育について専門的に学んだという教師もいるだろう。また、日本留学経験はあるけれども専門が日本語や日本語教育でないという教師もいるだろう。そのような教師と比較した時、養成科の卒業生には何らかの違いや特色があるはずだと我々は考えた。そしてその違いや特色が周囲に認知され、卒業生自身も自覚していることが、養成科の日本語教育界への貢献度と卒業生の満足度を上げていくことにつながるはずであると考え、卒業生の周囲にいる他のノンネイティブ教師との違いについて調査することにした。

（4）と（5）は、養成科の教育理念としている事柄がどの程度反映されているのかを調べるために入れた項目である。

3-4-3. 結果

第2回調査に対しての回答数は20であった。以下、その結果をまとめる。

（1）働いている日本語教育機関について（資料3－質問Ⅰ）

①機関の形態

日本語学校（日本語塾、補修班など）	15 機関
大学・専門学校など	5 機関
中学・高校	17 機関
個人レッスン	7 名
会社	5 機関
その他	1 機関：政府公務員職業訓練所

（複数機関で働いている人もいるため、機関数は回答者数を上回っている。）

現在も働いている、もしくは働いたことがある教育機関は、延べ総数で43機関であった。回答者のほとんどが2種類以上の機関（例えば中学校と日本語学校）で教えていたり、同じ種類の2つ以上の機関（例えば3つの高校）を掛け持ちしていたりするなど、複数の教育機関で働いていた。

回答した20名のうち「個人レッスン（のみ）で教えている」と答えた5名を除く就職先を種類別に見てみると、以下の通りとなる。

機関別就職者数

日本語学校（日本語塾、補修班など）	12 名
大学・専門学校など	5 名
中学・高校	9 名
会社	4 名
その他	1 名

回答者の半数以上の12名が日本語学校で教えている（教えたことがある）ことがわかった。また教育機関形態の数と、機関別就職者数を合わせてみた結果、中学、高校では9名が17機関で教えていることがわかった。

②学生数（1クラスの規模）

個人レッスンを除く

	10名以下	20名以下	21名以上	決まっていない
日本語学校 （日本語塾、補修班など）＊	9	7	1	1
大学、専門学校など	0	0	5	0
中学、高校	1	2	14	0
会社＊	0	2	3	1
その他（政府公務員職業訓練所）＊	0	1	1	0
機関合計	10	12	24	2

＊＝同じ機関で学生数について複数の回答があったもの

教えているクラスの規模（1クラスの学生数）は、大学、専門学校、中学、高校はそのほとんどが21名以上で、会社でもこの回答が多かった。ただし、日本語学校では、21名以上は1機関であった。これは第1次追跡調査において21名以上のクラスを教えている卒業生が少なかったのとは、対照的な結果である。（第1次追跡調査においては回答数24のうち21名以上のクラスを教えていたのは5名であった。）

③教師構成（その教育機関に日本人教師はいるか）

	いない	いるけど少ない	半々	日本人教師の ほうが多い	無回答
日本語学校 （日本語塾、補修班など）	0	10	1	3	1
大学、専門学校など	2	3	0	0	0
中学、高校	16	1	0	0	0
会社	1	4	0	0	0
その他 （政府公務員職業訓練所）	0	0	0	1	0
機関合計	19	18	1	4	1

教師構成については、どの教育機関も日本人教師が「いない」「いるけど少ない」という回答が多かった。

(2) 教育活動について（資料3 質問Ⅱ-1～5）

教育活動についての質問は、回答者が実際に行っている教育活動について答える項目（質問Ⅱ-1～4）と、教育活動に対する意識と姿勢（質問Ⅱ-5）に関する項目に分けて述べる。

質問Ⅱ-1～4についての結果は以下の通りである。

	現在よくしていること	養成科で学んで身についたかどうか		自信があるかどうか	
	よくする	習得できた	習得できなかった	自信がある	心配である
a. 初級の文法や表現の説明	19	17	1	16	2
b. 中級の文法や表現の説明	11	12	3	7	8
c. 語彙の説明	18	12	5	13	1
d. 会話の授業	17	13	2	5	7
e. 作文の授業	2	7	6	2	10
f. 読解の授業	11	10	3	7	2
g. 聴解の授業	8	9	6	7	5
h. ひらがな・カタカナの指導	17	12	1	14	0
i. 漢字の指導	10	8	3	11	2
j. 発音の指導	11	14	2	7	4
k. 日本語能力試験などの対策授業	10	3	8	3	3
l. ビジネス日本語の授業	3	5	9	0	10
m. アニメやマンガに関する授業	7	3	10	0	7
n. テスト作成や学習者の評価	9	11	3	6	3
o. 日本文化や日本事情についての説明	13	14	1	6	6
p. カリキュラム作成	7	14	3	6	6
q. 文法の補助教材の作成	9	13	1	9	5
r. 会話教材の作成	6	14	1	3	5
s. 読解教材の作成	2	9	1	1	5
t. 聴解教材の作成	2	7	5	2	7
u. 作文教材の作成	1	6	6	0	10
v. 板書	11	10	5	7	3
w. 学習者と日本人を交流させること	5	2	7	0	8
x. その他	2	4	2	1	1

回答者が行っている教育活動の中で「養成科で学んで習得できた」という回答が目立ったものに 、「自信がある」という回答が目立ったものに を付けた。また、「養成科で学んで習得できなかった」という回答が目立ったものに 、「心配である」という回答が目立ったものに を付けた。

「養成科で習得できなかった」と「自信がない」という回答が共に多かったのは e、l、m、u、w の 5 項目であった。

まず、作文に関する項目（「e. 作文の授業」「u. 作文教材の作成」）については、「よくする」という回答が少なく、「心配である」という回答が多かった。そして、四技能のうち作文の授業を行っている卒業生が著しく少なかった。そこで、作文の授業を行っていないと回答した卒業生に再度連絡を取りその理由を聞いた。その結果、作文の授業は学習者からのニーズが高くない、時間的なゆとりがないという理由で行っていない人が多いということがわかった。

「ビジネス日本語の授業」（l）と「日本人との交流」（w）に関しても「よくする」という回答が少なく、「心配である」という回答が多かった。

「アニメやマンガを使った授業」（m）については「養成科の授業では習得できなかった」という回答数が最も多かったので、追跡調査の結果を回答者に報告する際に何らかのサポートを行いたいと考え、その授業を実際に行っている回答者の何名かに連絡し、その授業方法をきいた。（授業を行っている回答者は、マンガを使ってオノマトペを教えたり、出てくる言葉やセリフを練習したりするなど、工夫していた。）

一方「養成科で習得できた」と「心配である」という回答が共に多かったのは b、d、o、p の 4 項目であった。

「心配である」と答えた項目に対してどんな対策をとっているかについては、以下の通りである。

参考書やインターネットで調べる	17 名
同僚教師と情報交換をする、誰かに教えてもらう	12 名
勉強会・研究会に参加する	7 名
養成科の先生にメールで質問する	4 名
その他	1 名（日本人の友達に質問する）

養成科担当教師にメールで質問をする人は少数派であり、多くの回答者が自助努力で解決していることがわかった。

次に質問Ⅱ－5「いつもどのような考えを持って教えているか」についての回答は、以下の通りである。

学習者の興味、関心に合わせて教えようと思う	15 名
学習者のニーズに合わせて教えようと思う	15 名
実際に役に立つ日本語を教えようと思う	15 名
教科書の内容をそのまま使うのではなく、 自分で工夫してみようと思う	15 名

学習者の意欲を高める工夫をしようと思う	14名
学習者が苦手とすることを意識して教えようと思う	9名
なるべく日本語で指示したり、受け答えをしたりしようと思う	7名
学習者の手本となるような日本語を身につけていたいと思う	5名
その他	1名

：毎日日本のテレビ番組を見ながら最新情報をチェックする。毎年 JLPT と JPT を受ける。

（3）教師について（資料3 質問Ⅲ－1～4）

①ノンネイティブ教師の長所・短所について

この項目は回答方法が記述式であるため、回答結果の一覧は資料4にまとめた。

まず、長所について分類すると、大きく3つに分けられた。その中で最も多かったのが、「母語の有効利用（回答数13）」である。「必要に応じて、学習者の母語で文法を説明したり、日本語と母語を比較しながら教えたりできること」「発音を直す時にも母語で説明すると効果的であること」などが挙げられていた。次に多かったのが、「学習者としての経験の活用（回答数10）」である。「自分が日本語を学習してきた過程を振り返り、わかりやすく指導できる。」「日本語の難しさを体感しているので、学習者の気持ちが理解できる。」ということが挙げられていた。そして、「（そのためには）自分が勉強してきた時代を思い出すことができなくてはいけない。」という指摘を書いた人もいた。3つ目は「自国の学習者への理解（回答数6）」である。「母語と日本語の違いや、両方の文化を知っているため、学習者が間違えやすいところに注意して教えられる。」「学習者の学習意欲を高めるための効果的な方法も考えやすい。」ということが書かれていた。

短所として挙げた項目についても3つに分類できた。その中で最も多かったのが、「教師自身の日本語能力への不安（回答数16）」である。「日本語として自然な表現が使えるのかどうか自信がない。」「学習者に質問された時に、日本語で何と言うかすぐに答えられない。」「発音やイントネーションが正確ではない。」といったことが書かれていた。次に多かったのが、「授業運営面でのデメリット（回答数8）」である。「作文や会話、ビジネス日本語などの授業が難しい。」「発音やイントネーションを教えることに限界を感じる。」「読解や聴解の教材を作るためには、自分が素材をきちんと理解していることが必要だが、それが難しい。」といった内容の記述があった。3つ目は、「最新の日本事情についての知識不足（回答数7）」である。「日本文化や日本事情に関する知識が不足している。」「日本にいないので、文献やインターネットで調べなくてはわからない。」「教科書にない日本人の考え方や文化などについて詳しく答えられない。」といった答えが書かれていた。

資料4の回答一覧からもわかる通り、回答者の感じていることには多くの共通性が見られた。

②養成科卒業の日本語教師とそれ以外のノンネイティブ教師との違い

この項目も回答方法が記述式であるため、回答結果の一覧を資料5にまとめた。

養成科卒業の日本語教師とそれ以外のノンネイティブ教師との違いについて、「授業の質が違う」という回答が20名全員からあった。その主な内訳を並べると以下の通りとなる。（・はその代表例である。下線の部分は、養成科の教育理念や重点指導項目と一致している部分である。）

「直接法で教えられる」

- ・ 直接法を習ったことがあるため、学習者の母語を使わないで文法の導入ができる。
- ・（初級レベルの授業は）直接法で教えることが可能である。

「実際に使える日本語をわかりやすく教える」

- ・ 自然な表現になるように気を付けて、例文を作成する。
- ・ 習った日本語がすぐ使えるように場面設定をして会話文を作成する。
- ・ 日本語を教える時、実際にコミュニケーションできることを目標にする。
- ・ 文法を教える時会話が多い。^{注(4)}
- ・ 文法の用法の差を理解し、分けて指導できる。

「学習者に合わせて教える」

- ・ 学習者のニーズに合わせて 段階的に教えられる。
- ・ 学習者が苦手な発音やアクセントなどを意識して教えている。

「目的を持って計画的に教える」

- ・ 効率的に授業を進めることができる。
- ・ 教案が書ける。
- ・ 常に物事の“目的”を考える。^{注(5)}
- ・ カリキュラム作成、授業準備、授業進行など基本的なポイントが把握できる
- ・ テスト作成や学習者の評価をする時、何を評価すべきかを考える。

「授業の質」以外に、「教師自身の日本語能力や知識レベルが高い（回答数5）」や、「学習者への理解、関心が高い（回答数3）」という回答もあった。また、1名だけであるが「他のノンネイティブ教師に会ったことがないのでわからない」という回答もあった。

③教師をしていて「よかった。」と思うのは、どんな時か

この項目も回答方法が記述式であるため、回答結果の一覧を資料6にまとめた。

この質問に対する回答も非常に類似しているものが多く、回答は以下の5つに分類できた。

- ・ 自身の教育能力に関して学習者から高評価が得られた時
- ・ 自身の教育の結果が学習者に好影響を与えたと感じられた時
- ・ 自身の教育活動の効果を実感できた時

- ・学習者の役に立てた時
- ・学習者の成長を実感できた時

④自国で使っているお勧めの教科書、勉強会など

この質問項目への回答としては、現在、実際に使用している教科書の具体名や、役立つサイトなどが挙げられていた。

お勧めの教材や教科書については、「日本で発行されているもの」「日本から輸入した教科書」といった日本で出版されているものへの信頼性がうかがわれる回答もあった。

お勧めの理由として書かれていたのは、説明などの詳しさ、使用しやすさ、補助教材の多さ、価格、手に入れやすさなどであった。

この質問項目には卒業生自身の経験から「勧められないもの」についての回答もあった。

また、「私は日本で外国人に日本語を教えています。ノンネイティブ教師として発音や表現の限界をよく感じます。同じ悩みの養成科の卒業生がいると思います。むしろ勉強会があれば紹介してください。参加したいです。」という意見も書かれていた。

3-4-4. 考察

調査結果をもとに、養成科のカリキュラムにおいて何が必要なのか、卒業生にはどんなサポートが必要なのかを考察する。

(1) 働いている日本語教育機関についての調査結果から

回答者の多くが複数の機関で仕事をしていた。（機関が違えば教育活動も様々であることが予想され、それに伴い抱える悩みも多いと思われる。）

日本語学校で教える場合の1クラスの学生数（クラス規模）は養成科で行っている教壇実習（少人数対象）の規模に近いことがわかったが、それ以外の教育機関の場合は21人以上という規模が大きいクラスである。3-4-3(1)②で述べた通り、第1次追跡調査において21名以上のクラスを教えている卒業生は少なく（24名中5名）、10名以下のクラスを教えていたのは12名であった。そのため、現在までの養成科の授業において、20名以上のクラスにおける日本語教育については扱っていない。しかし、卒業生が実際に教える可能性が高い以上、大規模クラスでの日本語教育についても、何らかの形で授業に取り入れて行く必要があるだろう。

教師構成については、第1次追跡調査時とは異なり、近くに日本人の日本語教師がいない、もしくは少ないことがわかった。近くに日本人の日本語教師がいないことが、ノンネイティブの日本語教師の教育活動や日本語力などにどのような影響を与えているのか、そのような場においてノンネイティブの日本語教師は、どのようなことを期待され、どのような役割を担わされるのかなど、さらに調査が必要だと思われる。

（2）教育活動についての調査結果から

回答者の多くが「よくする」と答えている項目では、養成科の授業で「習得できた」と答えている結果が得られた。

しかし、「アニメやマンガに関する授業」は、「よくする」という回答数が7なのに対して、「習得できなかった」という回答が10、さらに「心配なもの」としている回答が7であった。また同じような傾向の回答があったのが「学習者と日本人を交流させること」という項目である。この2項目については養成科の授業の中ではほとんど扱っていなかったものである。

アニメやマンガは、日本語学習開始のきっかけや学習目的となる、学習意欲を高めることが多いということを考えても、今後養成科の授業の中で、何らかの形で取り入れていく必要があるかもしれない。また、海外で教える場合、教育に協力してもらえる適切な日本人を探すのは難しいかもしれないが、日本語学習者が日本人と交流を持つことの学習効果や意義は決して小さくない。しかし、在学中に帰国後のことを想定して学習することは難しい。また、学生の出身国によっても取り巻く状況は様々であるため、多国籍の養成科の授業で扱うことにも難しさが存在する。この問題については、卒業後その悩みに直面した時に、問題を解決するためのサポートを行えるようにしたい。

「日本語能力試験などの対策授業」については、「よくする」という回答数10に対して「習得できなかった」が回答数8、「習得できた」が回答数3であった。養成科の学生は自分自身が日本語能力試験の各レベルを取得するための勉強は進められ、各レベルを取得することができているが、それを教育する立場になった時に困難を感じるのであろう。

「心配である」という回答について見てみると、「養成科で習得できなかった」ゆえに「心配である」と答えた卒業生がいる一方で、「養成科で習得できた」にもかかわらず「心配である」と答えた卒業生もいることがわかった。

「習得できた」と「心配である」の両方に印をつけた卒業生の数を見ると、bに関しては「習得できた」12名中4名が「心配である」と答えた。dでは13名中4名、oでは14名中5名、pでは14名中3名であった。

習得できたのに心配であるのはなぜか、さらに聞き取り調査を行いたい。仮にその理由が現状に満足せず理想の姿に近づきたいという気持ちの表れであれば、養成科が目指している教師像の「成長し続ける教師」を体現しているということになる。

心配なことに対する対処の方法としては、多くの卒業生が自分の力で解決しており養成科担当教員にメールで質問をする人は少なかった。卒業生から質問が寄せられた場合、担当教員はどんな質問にもできるかぎり答えること、そのサポート体制はずっと続くことを在学中に学生に伝えている。そして、これまでの卒業生とのメールなどでのやり取りを振り返ると、我々担当教員にとっては予想より少ないという印象の結果であった。自律的に解決できているのは大変頼もしく、うれしいことではあるものの、少ない理由を考えてみた。そして、少ない理由は卒業生が質問のメールを出しても答えを得られるまでに時間がかかることではないかと考えた。心配なことやわからないことがあった時、答えはすぐにほしいけれど、養成科の教員にメールを送っても、答えはすぐに返ってこないの、自分で調

べる、より身近な人に聞くといった方法で解決しているのではないか。また、中には遠慮している人もいる可能性もある。しかし、一部の卒業生は繰り返しメールで質問を寄せており、またその質問も「いい質問だ」と思うものが多かった。（資料7参照）この卒業生からの質問と担当教員からの答えを卒業生たちがシェアできるような場があれば、それに触発されて質問メールを送る人も増えるだろう。

「いつもどのような考えを持って教えているか」の質問に挙げた項目（質問Ⅱ-5 a～h）は、養成科の教育理念であり、担当教員が日々繰り返し伝えようとしていた事柄であった。養成科の学生にこれらを伝えるために、言葉で示すだけでなく、この理念に基づいた姿勢で教育に当たってきたが、回答はそれが十分に伝わっていたことがわかる結果であった。ただし、実際に仕事をしていれば、所属する教育機関によって授業内容やスケジュールが決められており、養成科の教育理念を維持できない場合もあるだろう。そして、自身の理念と実際に行う教育活動が矛盾し、その間で悩むこともあると考えられる。そういった場合を想定した何らかのケアやサポートは、養成科在学中から必要になると思われる。

（3）教師についての調査結果から

ノンネイティブ教師の長所に対する回答は、自身の学習者体験や母語がわかるという利点を積極的に活用していることがわかる回答であった。以前は、「母国では母語を使って教えるので、養成科で直接法を学ぶことはあまり意味がない」という考え方を持っている人もいたが、今は母国であってもなるべく日本語を用いて、日本語でコミュニケーションをする能力を身につけることを目標に、場面設定にも注意を払っているということがわかった。今後も、この姿勢を持ち続けてほしい。この点については現在在学している、そして今後入学してくる外国人学生にも伝えたい。

短所として挙げている記述には、日本を離れた環境において仕事をしながら日本語力を維持し最新情報を得ることがいかに難しいかがわかるものが多かった。それらを補填してゆくための助けになる日本人母語教師の少ない（いない）環境や、自分以外の日本語教師がいない環境に置かれた場合、自らの力で対処していかなければならないが、卒業生が望めばいつでもサポートされるような体制を作ることが必要だろう。

養成科の卒業生と他のノンネイティブ教師との違いについての回答を見ると、回答者全員がその違いを自覚していることがわかった。また、養成科で身につけた技術や知識を肯定的に評価しており、養成科の教育理念や重点的に指導した項目と一致するような回答もあった。このことは本校養成科で学ぶことの意義だと考えたい。

教師をしていて「よかった。」と思うのはどんな時かに対する回答内容は、同じ日本語教師として共感できるものであった。また、卒業生が日本語教師となり、仕事にやりがいを感じているということがわかる内容であった。さらにそのほとんどが、学習者の喜びを自身の喜びにしているという回答であった。

4. 今後の予定

4-1. 今後の養成科における指導についての提案

今回の調査をもとに、現行の養成科における指導に対して提案したいことが4つある。

まず、養成科の教壇実習で想定している5～10名の小規模クラスでの授業を基本として、大小様々な規模のクラスに対応できる応用力^{注(6)}を養う必要がある。

これは、第1回および第2回の調査結果から、個人レッスンで日本語を教えている卒業生（3-3-4参照）と、逆に学習者が20名以上の大規模クラスで授業を行っている卒業生が多い（3-4-3参照）ということからの提案である。

次に、アニメやマンガを日本語の授業に取り入れる方法についてである。学習者の身分や年齢によってはニーズがあるにも関わらず、卒業生の多くは教え方がよくわからないためにアニメやマンガを取り入れた授業は行っていないということがわかった。養成科の現行カリキュラムの中では、日本文化論で擬音語・擬態語について学習する際にマンガを使った授業も行っているが、日本語教育学的観点からもアニメやマンガを利用した授業の可能性などについて触れられるとよいのではないか。

3つ目は、ビジネス日本語についてである。3-3-3（4）においては、ビジネス場面で使用する日本語やマナーに自信がない卒業生が多かった。また、3-3-4ではビジネス日本語を教えることに不安を覚えており、ビジネス日本語の授業をあまり行っていない卒業生が多かった。心配であるために授業を行っていないのか、学習者のニーズがあまりないため授業を行わないのかは今回の調査では明らかにできなかった。卒業生がビジネス日本語の授業を行っていない理由や海外の学習者のニーズについて今後のさらなる調査を行い、ビジネス日本語の養成科での扱いについて考える必要がある。^{注(7)}

このような追跡調査をすると、「まだ身についていない」「心配である」「養成科で指導したほうがいい」といった回答が今後も出てくるだろう。しかし、養成科のカリキュラムは1年間で授業時間900時間という制限がある。そこで教えられることは限られている。卒業後の教育活動では想定外の状況に遭遇したり、養成科では教わらなかった作業をする機会も多いだろう。そのような場合に状況を正しく分析し対処方法を見出すことができるよう、その力を育成する指導^{注(8)}をしていく必要がある^{注(9)}ということを最後に提案したい。

4-2. 卒業生のサポート体制の充実に向けて

養成科の卒業生の多くは卒業後に日本を離れ、日本語教育関連もしくはそれ以外の日本語を使う仕事に就いているが、日本語力の維持、特に会話力と語彙力の低下に対する不安を感じている卒業生が多いということが今回の調査で明らかになった。これまで養成科教員は最新の日本事情などを「養成科通信」で配信してきたが、今後は卒業生自身の日本語力の維持・向上のために役立つものも発信できるようにしていきたい。

また、「交流の場を設けてほしい」という要望が多かったが、疑問や問題が生じた時に養成科の教員に相談したり、卒業生同士が情報や意見を交換したりできるようなネットワーク作りが必要だと思われる。そしてそれは、メールで問い合わせて返事を待つという形で

はなく、できるだけすぐに疑問が解決するような形式が望ましい。また、新しい学習アプリなどを授業で積極的に試用していることをメールで知らせてくれる卒業生もあり、そういった個々人の取り組みなども国や卒業年次を越えて共有できる場が必要だ。今回の調査の回答でもインターネットの活用が提案されていたが、卒業生同士が情報交換や相談をしやすい環境づくりが課題である。

近年は日本国内でも、国籍不問で教師を募集する日本語教育機関が増えてきているようだ。ノンネイティブ教師の利点が認められつつあるのかもしれない。実際、日本で日本語教師として活躍する卒業生も増えている。そのような卒業生のためにも、日本国内の日本語教育関連の研修会や就職に関する情報などは積極的に伝えていきたい。

日本国内はもちろん海外でも直接法（または直接法を部分的に取り入れた教授法）で授業を行っている卒業生が多い。（注：3－4－3（3）②参照。直接法で教えられることが、養成科出身のノンネイティブ教師の強みであり、他のノンネイティブ教師との差であると自覚していることが書かれている。）養成科在学中は本校日本語科の授業を見学する機会を設けているが、卒業後も直接法の授業を見る機会があれば役立つのではないかと考え、今後は本校教員の授業の動画を共有し、意見交換ができるような活動を計画している。

注

- （1）日本語演習においてビジネス日本語の授業を増やし、教育学において読解教材作成の指導を強化した。
- （2）「養成科ブログ」を開設し卒業生間の情報交換を可能にし、「養成科通信」という名称でメールを通じて卒業生に日本の最新事情を定期的に配信した。
- （3）卒業生に向けて様々な日本の情報をメールで配信しているもの。
- （4）この「会話が深い」というのは、「文法説明時における学習者と教師とのやり取りが多い」とも「会話を利用して導入する」ともとらえられるが、どのような意味で回答したのかは未確認である。
- （5）養成科の授業において、教材等における設問、学習者にさせることの全て、教師の行動の全てについて、常になぜそれをするのかという目的を強く意識させて指導していた（日常的に「その目的は何ですか。」と聞いていた）ことからこの回答が出てきたと考えられる。
- （6）この人数ならこのように対応する、ということをお教えるのではなく、人数に応じて臨機応変に教室活動などを工夫していく能力を意味する。
- （7）最近では養成科卒業後日本で就職する人も増えてきている。現在養成科では「メールの書き方」「電話のかけ方、受け方」などビジネス場面にも役立つ授業を行っている。たとえ海外でビジネス日本語を教えるニーズが少なかったとしても、別の観点からビジネス日本語の授業を行う意義はあるだろう。
- （8）この指導には養成科の科目に表だって現れないものも含まれる。
- （9）この対応力育成のためには卒業後のことまで視野に入れた指導計画があるとよい。

参考文献

国際交流基金「2015年海外日本語教育機関調査報告書」

杉田昌俊 角本浩美「日本語教師養成科の卒業生を対象とした追跡調査」『文化外国語専門学校紀要』第17号
2003年

資料1 2017年度までの累計卒業生数

韓国	133 名
台湾	93 名
中国	18 名
香港	4 名
タイ	5 名
ベトナム	5 名
フィリピン	4 名
ミャンマー	2 名
マレーシア	2 名
カナダ	1 名
フランス	1 名
ロシア	1 名
オーストラリア	1 名
モンゴル	1 名
合計	271 名

資料2 第1回調査シート

日本語教師養成科の卒業生アンケート

1. お名前（改名した方は、BIL 在学中のお名前も）
2. BIL 卒業（ ）年3月
3. ご住所
4. メールアドレス
5. BIL を卒業した後の仕事について、あてはまるものを選んでください。（複数回答可）
 - ①現在日本語を教えている
⇒質問6、7、8、9、10にお答えください。
 - ②日本語を教えたことがあるが、現在は教えていない
⇒質問6、7、8、9、10にお答えください。
 - ③日本語を教えたことはないが、仕事で日本語を使っている／使っていた
⇒質問6、7、8、11、13にお答えください。
 - ④仕事以外で日本語を使っている／使っていた
⇒質問6、7、8、12、13にお答えください。
 - ⑤卒業後、日本語を使う機会はない
⇒質問6、7、8、13にお答えください。
6. 養成科で学んだことの中で役立っていることは何ですか。（ご自由にお答えください）
7. 自分の日本語力が不足していると感じるのは、どんな時ですか。（ご自由にお答えください）
8. 卒業生の一人として母校B I Lに期待することやご意見があったら、何でも書きください。
9. どのような機関で教えています／教えましたか。（複数回答可）
 - a. 大学、大学院 b. 高校 c. 中学校 d. 日本語塾 e. 個人レッスン
 - f. その他（ ）
10. 何年ぐらい教えています／いましたか。
11. どのような仕事ですか。（複数回答可）
 - a. 日本語と母語の通訳・翻訳 b. 営業 c. 事務職 d. 専門職
 - e. その他（ ）
12. どのような場面で日本語を使っていますか／使っていましたか。
13. 日本語を教えたいという気持ちはありますか。
 - a. 機会があれば、今すぐ教えたい b. いつか教えたい c. わからない

質問5で①②を選んだ方には、再度アンケートを送りたいと思っておりますので、ご協力をお願いします。

資料3 第2回調査シート

1 回目のアンケートにお答えいただき有難うございました。

その後、かなり間が空きましたが、2 回目のアンケートを送りますので、回答をお願いします。お手数ですが、下記のアンケートに答えて8月31日までに送り返していただけないでしょうか。よろしくお願いいたします。

なお、アンケートの結果は養成科担当教員だけが閲覧できるものとし、厳重に管理します。

日本語教師養成科卒業生のアンケート（2回目）

I. 働いている日本語教育機関について

今までに日本語教師として働いたことがある教育機関（今、働いているところも含めて）について、名称、形態（①から選ぶ）、学生数（②から選ぶ）、教師構成（③から選ぶ）を教えてください。

- ・名称「 」、形態（ ） 学生数（ ） 教師構成（ ）
- ・名称「 」、形態（ ） 学生数（ ） 教師構成（ ）
- ・名称「 」、形態（ ） 学生数（ ） 教師構成（ ）

①機関の形態は？

- a. 日本語学校（日本語塾、補修班など） b. 大学・専門学校など
- c. 中学・高校 d. 個人授業 e. 自分で学校を設立 f. 会社
- g. その他（ ）

②一クラスの学生数は？

- a. 1～3人 b. 10人以下 c. 20人以下 d. 21人以上
- e. 決まっていない

③教師構成、その教育機関に日本人教師はいますか。

- a. いない b. いるけど少ない c. 日本人教師のほうが多い

II. 教育活動について

1. 以下の a～w の中で、あなたがよくしていることはどれですか。記号を選んでください。

- a. 初級の文法や表現の説明をすること
- b. 中級の文法や表現の説明をすること
- c. 語彙の説明をすること
- d. 会話の授業をすること
- e. 作文の授業をすること
- f. 読解の授業をすること
- g. 聴解の授業をすること
- h. ひらがな・カタカナの指導をすること
- i. 漢字の指導をすること
- j. 発音の指導をすること
- k. 日本語能力試験などの対策授業をすること

- l. ビジネス日本語の授業をすること
- m. アニメやマンガに関する授業をすること
- n. テスト作成や学習者の評価をすること
- o. 日本文化や日本事情について説明すること
- p. カリキュラムを作ること
- q. 文法の補助教材を作ること
- r. 会話の教材を作ること
- s. 読解の教材を作ること
- t. 聴解の教材を作ること
- u. 作文の教材を作ること
- v. 板書をすること
- w. 学習者と日本人を交流させること
- x. その他（ ）

2. 1のa～xの中のことは日本語教師養成科で学んで身についたと思いますか。
習得できたもの、できなかったものを記号で選んでください。

- ①習得できた「 」
- ②習得できなかった「 」

3. 1のa～xの中で、①自信があるもの、②心配なものはどれですか。記号を選んでください。

- ①自信がある「 」
- ②心配である「 」

4. 3の②で選んだものについて、どのような対策をとっていますか。記号を選んでください。

- a. 同僚教師と情報交換をする、誰かに教えてもらう
- b. 勉強会・研究会に参加する
- c. 参考書やインターネットで調べる
- d. 日本語教師養成科の先生にメールで質問する
- e. その他（ ）

5. いつもどのような考えを持って教えていますか。記号を選んでください。

- a. 学習者の興味、関心に合わせて教えようと思う
- b. 学習者のニーズに合わせて教えようと思う
- c. 実際に役に立つ日本語を教えようと思う
- d. 学習者が苦手とすることを意識して教えようと思う
- e. 学習者の意欲を高める工夫をしようと思う
- f. 教科書の内容をそのまま使うのではなく、自分で工夫してみようと思う
- g. なるべく日本語で指示したり、受け答えをしたりしようと思う
- h. 学習者の手本となるような日本語を身につけていたいと思う
- i. その他（ ）

Ⅲ. 教師について

1. ノンネイティブ教師（日本語が母語でない教師）の長所・短所とは、どのような点だと思いますか。
長所：・
・
短所：・
・
2. 日本語教師養成科の卒業生であるあなたと、他のノンネイティブ教師と比べるとどのような点が違うと思いますか。
・
・
3. 教師をしていて「よかった。」と思うのは、どんな時ですか。
4. 自国で使っているお勧めの教科書、勉強会などがあったら紹介してください。

最後まで答えてくださって、本当に有難うございました。この結果を養成科の学生のために、また卒業生のみなさんのために役立つように生かしたいと思います。

文化外国語専門学校
日本語教師養成科

資料4 ノンネイティブ教師（日本語が母語でない教師）の長所・短所 回答一覧

<長所>

- ・自国の学習者が間違えやすいものを知っているため、強調して授業ができる
- ・学習者と同じように日本語を並んだ経験があるため、学習者が理解しにくいところや間違えやすいところを前もって教えられる
- ・日本語初心者に対し母語で分かりやすく説明できる
- ・母語で文法を説明するのが簡単
- ・発音を直す場合、母語を使うと説明しやすい
- ・学習者のレベルを把握しやすい
- ・学習者がよく間違える文法は新人日本人教師より理解できている
- ・学習者の気持ちが分かる
- ・説明がしやすい
- ・自分の学習過程を振り返って授業を準備することができる
- ・母語と日本語の違いについて、学習者に理解させられやすい
- ・日本語の勉強を通して、両国の文化が分かっているため、学習者の日本語学習の意欲を高められる
- ・自分の習得した経験から、学習者への助言ができる
- ・学習者の母語で、教えることができる
- ・日本語学習の難点が比較的わかる
- ・必要に応じて学習者の母語で説明できる
- ・文法や語彙の意味などを母語で説明するから理解させやすい
- ・日本語を勉強している時のいろいろな失敗を共有できる
- ・理屈で学んできた経験を生かして、学習者の苦手なところを優しく指導できる
- ・学習者と同じ言語を使っているため、母語で発音やアクセントが（舌の位置なども）指導できる
- ・母語の決まり文句やよく使われるフレーズを日本語と比較しながら教えられる
- ・母語と比べながら説明できる
- ・母語の使用によりよりわかりやすく説明できる（特に文法）
- ・母語干渉についての理解（知識）は、学生の言語学習に役立てられる
- ・教師の母国語を使うと、学習者は自分がよく間違える文法や表現がわかる
- ・文法や表現の差をよりわかりやすく説明できる
- ・母語で説明できること
- ・同じ外国語を勉強するという立場から考えると、学習者の苦手の部分を把握しやすい
- ・自分も日本語の難しさを体験しているので、学習者の気持ちがわかり、それによって学習者へのサポートがより簡単になる（ただしそのためには勉強してた時代を思い出さなくてはならない）

<短所>

- ・学習者や自分が言っていることが文法的には合っているけど、それが日本人がよく使う表現かどうかその場ですぐに確認できない
- ・ネイティブ教師のように自然な日本語が使えないので、それが教えられない
- ・単語のアクセントやイントネーションなどは日本人教師ほど正しくない
- ・日本の生活経験が十分でないと、（より）面白い授業ができない
- ・自分で本屋やネットで資料を調べなければ、自分が知っている日本の現状がよくわからない

- ・より分かりやすく説明できない
- ・自身の日本語力がまだ足りていない（もしレベルの高い学習者に何か聞かれたとき）
- ・発音を教えるのが大変（自分が濁音の発音が苦手なので、教えるときも大変）
- ・ローマ字を英語の発音で発音したくなる
- ・正しい日本語が使えない時がある
- ・正確に発音できない日本語がある
- ・日本語を使うチャンスが少ない（だんだん少なくなる）
- ・自身の発音に母語の訛りが多少ある
- ・言葉のニュアンスや文化に関して、つい母国視点から教えてしまう
- ・日本語力が全般的に不足している
- ・日本文化や日本事情に関する知識が不足している
- ・日本語でなんというかすぐ答えが出ない
- ・いくら日本語を学んでも日本人のような語感には身につけることができない（そのため、作文や長い会話、ビジネス日本語などの授業はプレッシャーになる）
- ・発音の指導
- ・日本人の考え方、日本事情、教科書にない文化など
- ・中上級の会話や作文指導が難しい
- ・学習者はノンネイティブ教師の発音がより標準ではないかという声もある。
- ・発音やイントネーションの矯正は無理
- ・日本人っぽい表現ができない
- ・発音やイントネーションが日本人のように完璧ではない
- ・日本語以外の日本についての質問にくわしく答えられない
- ・発音が悪い
- ・自然な表現があまりできない
- ・日本に関わる基本的なことなど日本文化と日本事情などを調べないとわからない
- ・日本人の話し方や最近流行ってる諺などをちゃんと教えられない（何をしても日本人にはなれないので、不自然な日本語を教えてしまう）
- ・教材を作るのが難しい（読解や聴読解の教材を作る前に自分が使いたい教材をちゃんと理解したか確かめないといけない）

**資料5 文化外国語専門学校の日本語教師養成科を卒業した日本語教師が
他のノンネイティブ教師と違うところ 回答一覧**

- ・先生としてきれいな日本語を使おうと心掛けていること
- ・常に学習者が興味を持っていることやニーズの把握を重要視している基本的な態度ができていること
- ・直接法を習ったことがあるため、学習者の母語を使わず、新しい文法の導入ができること
- ・教案が書けること
- ・学習者が苦手な促音、長音や単語のアクセントなどを意識して教えていること
- ・他の教師より発音が正確で、文法（説明）も詳しいこと
- ・（養成科での経験が充実していたからこそ）、初級クラスの授業は余裕をもってあたれること
- ・学習者への関心度と責任感
- ・日本語に関する知識
- ・学校で教材や教え方について学んだので、学んでいない人より準備時間が少なくて済むこと
- ・効率的に授業が進められること
- ・日本と母国はアジアの国なので、言葉と文化に共通性があるため、西洋人教師と比べると、（日本語の）説明がしやすいこと
- ・日本語の教え方をいろいろ勉強できたので、学習者にわかりやすく教えられること
- ・教える時、学習者と交流することが多いこと
- ・常に物事の“目的”を考えること
- ・自然な表現であることに心がけて、例文を作成すること
- ・（初級レベルの授業）直接法で教えることが可能であること
- ・習った日本語がすぐ使えるように場面設定や会話文を作成できること
- ・学習者のニーズに合わせて体系的に（ステップバイステップで）教えられること
- ・文法の用法の差を理解し、分けて指導できること
- ・テスト作成や学習者の評価をする時、何を評価すべきかをよく考えること
- ・日本語を教えるとき、実際にコミュニケーションできることを目標にすること
- ・授業の準備や評価などの前に目的（生徒のニーズ）を考えること
- ・日本語についての理解が深く、説明の仕方が分かりやすいこと
- ・カリキュラム作成、授業準備、授業進行などは基本的なポイントが把握できていること
- ・文法や表現の説明の時、場面設定をしてから例文を作るため、その会話の流れで文法や表現が理解できるようにテキストが作れること
- ・発音がいいこと
- ・文法を教える時会話が多いこと
- ・詳しい説明ができること
- ・わからない
- ・ほかのノンネイティブ教師にあったことがありませんからわかりません。

資料6 教師をしていて「よかった。」と思うのは、どんな時か 回答一覧

- ・自分を通して日本語を使って立派な一人前になり、大学生や社会人、ビジネスを成功させているというお便りを聞いたり、もらったりした時やりがいを感じています。講義やレッスンの問い合わせが 絶えずくるとき、教師をしていてよかった、お手伝いできる対象がまだまだいると知り、感謝の気持ちでいっぱいになります。
- ・今教えている学校で校内朗読大会があったのですが、生徒たちと一緒に練習し、いろいろな方法で五十音さえできない生徒たちをレベルアップさせて、最後大会で賞を取ったことはよかったと思います。
- ・教えた生徒が台北市の高校生スピーチ大会で二位を取った時です。連続二年その大会で二位を取りました！（違う学生です。）自分は本当にびっくりしました。自分の遊びのような練習方法でそこまでできたというのは、意外でした。
- ・学習者が日本語が使えるようになった時
- ・学習者の疑問が解けて、「分かりました」と言ってくれる時
- ・（学習者が）授業が理解できた時
- ・（学習者に）お礼を言われた時
- ・学生の日本語力が成長する様子を見る時
- ・学生の日本語ができたという喜びを感じた時
- ・学習者が日本語を勉強すれば勉強するほど日本語が好きになった時
- ・学習者が日本語で仕事できた時
- ・学習者が「先生 日本語を教えてくれて ありがとう」と言った時
- ・学生から、説明がわかりやすいというフィードバックが返ってきた時
- ・学習者の成長が見られた時
- ・「先生のおかげで日本語が好きになりました」という言葉を聞いた時
- ・私と生徒がお互いに励ましあいながら日本語を楽しく学ぶ時
- ・生徒からお礼を言われた時
- ・生徒の役に立った（将来、夢、などに）時
- ・ひらがなも読めなかった学習者が少しずつ進歩して自分が表現したいことを日本語で話せるようになった時
- ・昔授業していた時、ある学生から「先生（の授業）がいいです」と言われた時
- ・教えた文法などを学生さんがきちんと使っていたり意味をちゃんとわかっていたり成長している学生さんがいたりする時
- ・学習者が日本語に興味を持ち、今後も勉強し続けたいと思ってくれた時

資料7 卒業生からメールで寄せられた質問例

Aさん（韓国）

- ・自己紹介の時、「どうぞよろしくお願いします。」「よろしく。」「よろしくお願いします。」「どうぞよろしく。」とあいさつしますと教えていますが、「お願いします」だけ言うのは間違いですか。ドラマで「よろしく。」「お願いします。」という会話を見たことがありますか。
- ・呼び方についての質問です。姑を他の人に紹介する時、何とさえいいですか。また、教科書に「私、お姉ちゃんが二人」という会話があります。学生に「どうして姉が二人と言えませんか」と質問されました。何と説明すればいいのかよくわかりません。
- ・名詞と名詞の間に「の」をつけますが、「高校2年生」とか「中学3年生」とかはどうして「高校の2年生」じゃないですか。そういってもOKですか。使っている教科書に「小学校の5年生」と、「の」がついています。もし学校ということばには「の」がついて、高校とか中学、大学は省略ということですか。

Bさん（韓国）

- ・ポニョとかマルコなどのアニメを見てると、親を名前で呼んでいます。それは普通にあることですか。

Cさん（韓国）

- ・日本で売っているいい読解教材があるなら、勧めていただけたらと思ってメールを書きました。私が担当するのは、初級が終わって日本語能力試験のN3を準備する段階のレベルです。本じゃなくても、いい文章があったら紹介してください。

Dさん（韓国）

- ・「教える」「驚く」「有名だ」には、様態の「そうです」をつけることができませんか。もしできなかつたら、他にどんなことばがあるか教えてください。

Eさん（韓国）

- ・実は今、どうしても楽しくならない授業ができて、どうすればいいか悩んでいます。先週から文化の中級Ⅱに入ったんですが、授業中にかく疲れます。私は文型・表現、副詞のところをやります。JLPTと重なることが多くあって、いいのはいいんですが…。JLPTは韓国語でしたから、笑い話もできて、それなりに楽しかったです。でも、ある程度のレベルの文型は、日本語でどうするのか、ぜんぜんやり方がわかりません。韓国語で説明するのが身についてしまって、日本語で説明するとしたら、ストレートに言ってしまう意味がないから、遠回しに言ったらだらだらした、くどい、つまらない授業になってしまいます。この間は、せっかく工夫した導入だと思ったのが、ある優秀な学生に鼻で笑われて、顔が真っ赤になったことも。全体的に簡潔にできない、だんだん自信はなくなる、授業をしたくなくなります。先生、中級の文法の授業はどうなさいますか。初級と同じように使う場面を挙げて文型を引き出しますか。

でも、どうしてもそれは時間の無駄なように見えます。でも、最初から意味を教えれば、学生は、あくびをします。日本語で授業するのに、向いていない気がします。長い間韓国語で、韓国式で日本語を教わってきたせいでしょうか。ちなみに、失敗した導入の一例です。

「からには」

皆さんは何を決心してこの学院に来ましたか。

L：日本人と話す。試験に合格する。（板書）

これを決めました、だから当然何をしますか。義務は何ですか。

L：がんばります。一生懸命勉強します。…（板書）

これを一つの文に、日本人と話すを決心したからには、がんばります。

試験に合格すると決心したからには、一生懸命勉強します。

読みましょう。

（板書したのを読むつもりだったが、Lの反応がなく一人で読む）

じゃ、教科書へ行きましょう。例文、一番、一緒に～～～

これでした。

このもやもやした気持ちが晴れますように！先生方、お忙しいところ申し訳ありませんが、いい方法をお教え願えませんか。

Fさん（韓国）

- ・今、実務ビジネス日本語のクラスを担当しております。上級の学生も何人かいて、自分もいろいろ勉強していますが、カリキュラムや教材などでいろいろ悩んでいます。いい教材や、いい教え方があれば紹介してくださいませんか。

Gさん（台湾）

- ・70人の会話クラスを持っていますが、教育経験の少ない私にとってクラス運営と教室管理が非常に難しいのです。このような授業でいったいどうすれば学生の会話力が育つか悩むばかりです。また、会話クラスで学習到達度を測るのに口頭試験を行うのが一般的だと思いますが、学校では試験は定めた期間中のみというルールがありますので、中間テストが迫ってきたにもかかわらず、200分間以内で70人の口頭試験を終わらせる方法はまだ見つかっていません。大人数の場合、どのようなテストを行えばいいのか、アドバイスいただけますと幸いです。
- ・毎日の授業で自分が学生に教えたいことと台湾の教材で扱われることは若干ずれがあるような気がします。「楽しくシリーズ」を補足教材として使えればと思いましたが、台湾大新さんのところでは、「聞く」しか調達できませんでした。日本のamazonでも調べましたが、「読む」も「話す」も在庫切れで、入荷予定が明確でないということです。もしご存知であれば、これらの教科書と教師指導書の入手方法を教えていただけると助かります。
- ・今年目標として、まずは通訳と翻訳の勉強にチャレンジしようと考えています。お手数をおかけして恐縮ですが、日中通訳・翻訳のおすすめの入門書や教材などがあれば、教えていただけるとありがたいです。
- ・模擬授業で、同じパターンしかできないという指摘を何度も受けました。違う教え方にチャレンジしてみたいのですが、じっくり考案する時間がなく、なかなかいいアイデアが出ない現状です。活動集などから何かのヒントをもらえたらいいと思いますが、もしおすすめの教材や書籍があれば教えていただけるとありがたいです。

Hさん（台湾）

- ・「手に入る」「手に入れる」「手にいる」の三つはよく似ているので、混乱しています。
私の考えたところでは、
「手に入る」：自動詞なので、自分の意欲ではなく、何かの方針、流れに従った自然の結果？？
「手に入れる」：他動詞なので、自分の意思と努力でゲットした。
「手にいる」：「手に入る」とはほぼ同じ、「手にいる」のほうが古文に用いられて、あと熟練するの意味もある。
正しいかどうか確認していただけないか。

Iさん（台湾）

- ・間違いだらけの文章を出したらやはり恥ずかしいですから、先生たちにお手数をおかけしますが、（研修の）感想文を読んで頂けませんか。もし、間違いがあったら教えてください。よろしくお願い致します。
- ・いわゆる進学クラスに授業を教えています。初級・初中級を終え、現在中級教科書を使用しています。難易度はうんと難しくなっています。語彙は抽象的な言葉が多くなり、曖昧な表現や、省略する言い方も増えてきました。なるべく、例文を使って説明していますが、非漢

字圏の学生たちにとっては、理解しにくい言葉・表現だらけです。

先生たちは非漢字圏の中級学生にどう教えますか。

Jさん（台湾）

- ・今日から中級の授業をし始めます。教材は台湾で出版された「新文化日本語中級」です。「みんなの日本語初級」と違って、この教材にはほとんど副教材がなくて、どうやって教えるのか本当に悩んでいます。授業の準備をしましたが、文法の説明の形になってしまいました。どうすれば学習者に学んだ文型を生かせるのか全然わかりません。このまま授業をすると、あまり四技能を高める授業にならないと思います。本当に心配しています。

Kさん（台湾）

- ・昨晩の授業で学生たちに下記単語の発音練習をさせたとき、少し疑問を感じたので、質問致します。
 - ①ラジオ放送：ラ\ジオ+ほ/うそう → ラ/ジオほ\うそう
 - ②天気予報：て\んき+よ/ほう → て/んきよ\ほう
 - ③男女平等：だ\んじょ+びよ/うどう → だ\んじょびよ/うどう
 ①②のアクセント規則ははっきり分かりますが、③は例外扱いでいいでしょうか？
 「だ/んじょびよ\うどう」と発音したら、やはり変に聞こえるのでしょうか？
 以上、ご回答をお願い致します。

Lさん（台湾）

- ・文型「～ないで」と「～なくて」の用法について…。確か以前勉強したのは、「～ないで」という文型は「付帯状況」と「代わりに」の二つの意味を持っていました。「～なくて」は「原因、理由」として使われるのですが、今、日本語の教科書の中に、「雨が降らないで困っています。」という文が出ています。「雨が降らなくて、困っています」が正しいと思いましたが、塾の日本人の先生に聞いたら、「雨が降らないで、困っています」という文は間違っていない、両方とも使えると言われました。本当に日本人は両方とも使いますか。教えてください。
- ・教科書の「昨日、家族とレストランで食事をしました。」という例文について学生からの質問がありました。どうして「食事しました」を使わないで、わざわざ「食事をしました」と言ったのでしょうか？私はその場で、「まったく同じですよ、どちらの用法でもOKですよ。」と答えたんですが、後でよく考えれば、なんとなく少し違うような気がします。もしかしたら、「食事しました」を使うとき、食事の動作だけ強調するが、「食事をしました」を使うとき、動作じゃなくて食事ということを注目させたいのかなと思いました。調べても答えがわかりません。「食事しました」と「食事をしました」は違いがありますか。

Mさん（台湾）

- ・「～中」の読み方は「じゅう」と「ちゅう」がありますが、区別の方法はありますか？
- ・助詞などの使い方について伺いたいです。
 - ①夜 11時に過ぎたら、電話をかけないようにしてください。
夜 11時を過ぎたら、電話をかけないようにしてください。
 - ②歌舞伎について知りたいですが、どんな本を読めばいいですか？
歌舞伎について知りたいですが、どんな本を読んだらいいですか？
 - ③木村さんに赤ちゃんが生まれたのを知っていますか？
木村さんが赤ちゃんが生まれたのを知っていますか？
 - ④ちょっとスーパーで食べ物を買って来ます。
ちょっとスーパーへ食べ物を買って来ます。
 - ⑤電車に傘を忘れてしまいました。
電車で傘を忘れてしまいました。
 どちらが正しいですか？どうやって説明すればよろしいのでしょうか？

- ・「AはBに比べて～」 「AはBと比べて～」

今まで私は「に」を使っていたが、今使っている教科書では「と」も載っています。この二つの文型の差異がありますか？

Nさん（台湾）

- ・「は」の使い方について教えていただけませんか。

文化の教科書に下記の例文が書いてあります。

- ① A：クラシック音楽が好きですか。（L6）

B：いいえ、クラシック音楽はあまり好きじゃありません。

- ② 中国語が話せます。（L22）

中国語は話せません。

- ③ アルバイトの方も使うことができます。（L22）

ここでたばこを吸うことはできません。

②と③については、中国語の文法ガイドに、否定の場合は「は」を使うと書いてあります。ほかの教科書（みんなの日本語など）では①～③のどれも否定のとき「が」を使っています。教えている塾の日本人の先生に聞いてみたんですが、その先生はわざわざ「は」に替えるのはおかしいと言っていました。

きっと何か「は」を使う理由があると思って、「はとが」という参考書で調べてみたら、やはり対比の意味が含まれる場合、対比対象をはっきり出さなくても、「は」を使うようです。それに否定の場合は「は」を使うことも多いようです。ただし、否定だから「は」に替えなければならないとは書いてありません。

やはり、まだ混乱しています。使い分けを教えていただけませんか。急ぎではありませんが、よろしくお願いいたします。

Oさん（マレーシア）

- ・得意先へのメールについての質問です。私はいつも「いつも大変お世話になっております」からスタートしますが、「平素は大変お世話になっております」のほうがよいでしょうか。初回メールするお客様に対して「いつも大変お世話になっております」は使えますか

- ・会社で毎日日本のお客とやり取りをしていますが、お客様から退職のメールを頂いたら、どう返事すればよいかわかっています。教えて頂けませんか。よろしくお願いいたします。

Pさん（ベトナム）

- ・会話の授業なんですけど、勉強したくないタイプの学習者はどうすればいいですか？